
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 105

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2081. あの夢について
- 2082. 夢の続き: 奇妙な文章表現と人間の生活空間
- 2083. 時間感覚の変容
- 2084. 三つの夢
- 2085. 協働プロジェクトより
- 2086. 秋からの研究に向けて
- 2087. 就寝前に
- 2088. 壮麗な雪景色
- 2089. 天気の状態特性
- 2090. 一步一步の歩み
- 2091. ほとばしるエネルギーと秋からの研究について
- 2092. 気づきの意識と自己の基底
- 2093. 変奏曲
- 2094. 国際ジャン・ピアジェ学会での発表決定
- 2095. インターン開始の朝より
- 2096. 連日連夜の夢
- 2097. インターン先のオフィスから
- 2098. 実現された一步とこれからの一步
- 2099. インターン初日の振り返り
- 2100. 今後の大学勤務について

2081. あの夢について

今朝もまた、昨日に引き続き雨模様である。昨日は本当に雨も風も強く、外出の際には随分と手こずらされる一日だった。激しい雨風によって、七年前にボストンで購入した折り畳み傘が壊れてしまい、昨日フローニンゲンの街の中心にあるデパートで新しいものを購入した。この日の出来事とこの新しい傘は一つの記憶の中に仕舞われることになるだろう。

先ほど、今朝方見ていた夢について再び回想していた。ここ四日間連続して印象に残る夢を見ている。夢の印象度合いと起床時の爽快さにはあまり相関関係を見出せないが、今朝の目覚めは大変良かった。六時に起床し、身体を少しばかり目覚めさせたところで一日の活動を始めた。

今朝方に見ていた夢は、今思い返してみても温かい気持ちを誘う。「1993年夏」というのは、実際には東京から山口県に引っ越しをした翌年の夏だと思う。確か私は、1992年の春に山口県に引っ越しをしているはずであるし、夢の中に出てきたA君という人物を私は知らない。私が感動していたのは、実際に存在する具体的な人物との間に育まれていた友情に対してではなく、一人の人間と別の人間が生み出す友情の本質、すなわち友情のアイデアのようなものに触れていたからだろう。

夢というのは、具体的な形として実存しないものを私たちに提示することがあるのと同時に、その提示された形には、完全なまでに存在する抽象的な主題が含まれていることがある。友情のアイデアはまさにその一つだろう。

友情というのは抽象的なものであるが、あの夢の中には間違い無く、具体的な友人と私が育む友情のアイデアが確かに存在していた。夢の持つ形象性と形象を超えた抽象的主题を暗示する力には驚かされるばかりである。

今日もまた、一人かつ一人ではないこの奇妙な世界の中で生きることが始まった。早朝からの雨も雨脚が強まり、時間の経過と共に、書斎の窓に打ち付けられる雨の音が大きくなる。

昨日、行きつけのチーズ屋の店主と雑談をしていた時に、明後日までは雨の日が続き、そこからは晴れの日が続くが、まためっきり寒くなる、という話を聞いた。晴れの日が連続することはこの数ヶ月間ほとんどなかったため、太陽の光を浴びれる日が続くことは有り難いのだが、天気予報を確認す

ると、確かに店主の言う通り、今週の土曜日から来週にかけては最低気温が軒並みマイナスになっている。

研究インターンの始まる日は、最高気温が0度、最低気温がマイナス4度を示している。日照時間が伸びて、少しばかり春の到来の予感を感じていたが、また厳しい冬に戻ってしまったかのようだ。

今朝方の夢にモチーフとして現れたテレフォンカードのことが気になり、私は大切に保管している、父の描いた絵が採用されたテレフォンカードを久しぶりに眺めてみることにした。改めて眺めてみると、これまで気づかなかったことに気づかされた。

私はてっきり、家族三人を表した三匹の可愛らしいハリネズミが気球に乗って空を飛んでいると記憶していたのだが、実際には宇宙の中を気球で飛んでいるようだった。無数の星で煌めく銀河の中を気球で飛んでいる様子が描かれており、ハリネズミの父とハリネズミの子供が指差す方向を、ハリネズミの母が望遠鏡を使って眺めており、指差す方向には黄色く輝く太陽とその周りに一段と美しく輝く星々がある。

このテレフォンカードの左下を眺めると、このテレフォンカードはどうやら、新日鉄の労働組合の支援のもとに作られたものであるらしいことがわかる。久しぶりにこのテレフォンカードを眺め、一日の仕事に取り掛かるために、このテレフォンカードを元の場所に保管しようと思ったその時に、再度三匹のハリネズミが視線をやる方向を眺めた。すると、光り輝く太陽と銀河のその上に、「し・あ・わ・せ・∞」の文字が記されていることを初めて知った。

無限に広がる宇宙と共に、私たちの内的宇宙に生じる幸福というのは本来無限大なのだろう。そうした幸福を奪い合うのではなく、幸福の創出に関与し、幸福を分かち合う方向に人類は一丸となって歩みを進めることはできないのだろうか。フローニンゲン:2018/2/1(木)07:49

No.712: Longing

It has been snowing very much since the early morning in Groningen. Yet, the longing for walking in the snow showed up within me. Groningen, 11:59, Saturday, 2/3/2018

2082. 夢の続き：奇妙な文章表現と人間の生活空間

八時を迎える頃になり、辺りはようやく明るくなり始めた。私は相変わらず、今朝方の夢と向き合っている。いやむしろ、そこに向かわせる何かが夢の中にあると言った方が正しいだろう。それと向き合わなければ前に進ませてくれない確かなものが夢の中にある。そんな気がしている。

そういえば、四枚のテレホンカードから始まったあの夢の続きがあったことを思い出した。続きと言ってももちろん場面も内容もガラリと変わるものである。夢はどうやら穏やかな転調をするというよりも、激しい転調を好む傾向にあるのかもしれない。自分の夢の場合は特にそうだ。

続きの夢として現れていたのは、女性の友人の結婚相談を受けるものである。その友人は私の友人と結婚することに決めていたのだが、どうやらその話は立ち消えたらしい。男性の友人の方が結婚を突然断ったそうなのだ。

彼女の自宅は豪邸であり、その豪邸の一室で、私は彼女の話聞いていた。

女性の友人:「ちょっと、これ見てくれる？彼からこんなメールが届いたのよ」

そう彼女が述べ、私はそのメールの文章を眺めた。メールの文章を読もうとするために画面をスクロールすると、その男性の友人の肉声が吹き込まれており、メールの文言の文字を目で追うごとに彼の声が流れてくる仕掛けになっていた。

メールの冒頭は、「XXさん、ベートーヴェンの荘厳な音楽が激しい情熱を伴った風のように流れる今日この頃・・・」という文言で始まっていた。

その男性の友人がそもそも彼女のことを「さん付け」で呼ぶのは不自然であったし、そもそも彼はクラシック音楽など一切聞かない人間である。また、小難しい二字熟語を用いることなど私の記憶を辿る限りこれまで一度もなかったように思う。

彼のメールの続きを読んでもみると、その吹き込まれた声の後ろで、別の友人が台本に書かれた文言を棒読みするかのように声を上げているのが聞こえた。メールの差出人である彼は、別の友人が棒読みする台本をさらにまた棒読みしているかのようにだった。

メールを途中まで読み終わると、女性の友人は結婚を断られた悲しみを通り越して、もはや呆れ顔を示していた。

「ベートーヴェンの荘厳な音楽が激しい情熱を伴った風のように流れる今日この頃」という冒頭の書き出しを読んだ時、それがどのような日々なのかを想像できてしまう自分には思わず笑みがこぼれたが、その後続く文言は私には決して想像できない世界観が込められており、その独特な文章表現には目を見張るものがあった。ただし、彼のそうした文章表現に感心しては、今日の前にいる彼女に申し訳ないと思い、私は豪邸の一室で引き続き彼女の話聞き続けた。

その夢の続きとして見ていたのは、企業へ成人発達理論に基づいたワークショップを提供するものだった。そのワークショップでは、成長支援に関する具体的な手法を紹介し、そのツールを活用できるようになることが焦点に置かれていた。

ワークショップが行われる会議室は少し変わった形になっており、高さのあるステージが部屋の前方にあった。それは学校の体育館のステージのような印象を私に与えた。しかも、その会議室のステージのど真ん中にピアノが置かれており、ピアノの椅子に一人の参加者が座っており、その方は会議室に背を向けている。

私はファシリテーターとしてその場に参加していたのだが、そのステージで説明することはせず、参加者全員と同じ目線の高さで説明をしていた。ワークショップの途中で、私はピアノに腰掛けるその方に声をかけた。

私:「XXさん、これまでのところいかがですか？」

その方:「はい、これまでの内容はとてもわかりやすく、非常にためになっています」

そこから私はどうしてかわからないのだが、少しばかり突飛な切り返しをした。

私:「よく高層マンションなどに住もうとする人がいますが、あれは心身に悪影響を与えますよね。人間が本来立って歩くことのできないような場所に生活空間を築こうとすると、目には見えない不安に一日中取り憑かれることになるんです」

その方:「はあ。ええ、そうですね」

私:「人間は高さの高い場所にずっといてはならないんです。ましてや高層マンションの上に住むなんてのもってのほかです。そういえば、XXさん、ここはステージの上ということもあり、少し高さが高いと思うのですが、大丈夫ですか？」

その方:「ええ、大丈夫です」

私はその方とそのようなやり取りをした後、ステージから降り、再び他の参加者の方々に向けて説明を続けた。すると、一人の方からかなり細かい点に関する質問を受けた。その質問に対して私は、質問者が期待している以上の情報量の説明を与えてしまい、質問者の方はそれに圧倒されているようだった。私は質問者の方の表情を見て、少し説明し過ぎてしまったと反省をした。

その後もワークショップは進んでいく中で、私はやはり先ほどの会話にあった、人間が本来足を踏み入れることのできな場所で生活空間を構築することの危険性について考え続けていた。フローニンゲン:2018/2/1(木)08:27

No.713: Weather and State

The weather does not have stage characteristics. Instead, it is a state per se.

The snow from the early morning already stopped before lunch. I can see snowmelt on the road. It indicates that the weather is a transient and variable phenomena. Groningen, 14:40, Saturday, 2/3/2018

2083. 時間感覚の変容

今日は少しばかり時間感覚がいつも以上に変容していたような一日だった。確かに一日を今終えようとしているのだが、何か三日間ぐらいの時を過ごしたように思う。時間としてはあっという間に過ぎ去ったといういつものながらの感覚が身を包んでいながらも、その感覚の芯にあるものが、どこかいつもより濃厚な感じがするのである。その濃厚さが、一日を三日のように感じさせる時間感覚の変容の核にある。時間は本当に伸び縮みするらしい。

先ほど浴槽に浸かりながら、またしても今後の生活拠点についてぼんやりと考えている自分がいた。やはり二年間以上同じ場所に住む自分というものがまだ想像できず、もう少し年齢を重ねるとその辺りの感覚も変わってくるのだろうか。実は、意識的な自己である私自身は、生活環境の変化による刺激を求めることはない。むしろ新たな刺激を極力減らし、淡々と毎日を過ごしていくことを好む傾向さえある。それはまさに起床時間や就寝時間、食事や一日の行動内容と行動リズムのそれに全て現れている。だがどうしても、生活拠点だけは少なくとも数年に一回はこの世界を転々とする形で変えている。

浴槽に浸かりながら、私はぼんやりとこれから数十年間は数年に一回の頻度で住む国を変えているように思う。ただし、仮に次に米国に足を踏み入れることになれば、私はしばらくその場所で生活をしていいのではないかと思っている。そのような予感がどこなく自分の内側に漂っていることは、以前の日記にも書き留めていた。遍歴を好む魂を持っているだけに、その魂が落ち着く場所というのはこの世界において限りなく少ないのかもしれない。

今朝も日本企業との協働プロジェクトに関する仕事があり、明日も二件ほどある。これから三月末までは、欧州時間の平日の午前中は協働プロジェクトに関する仕事が大抵入っている。それもまた自分の日々に欠かせないものとして存在している。全てが一つのライフワークの下に営まれている気がするのだ。それはとても有り難いことであり、幸運なことだろう。

これから就寝までの時間にかけて、再び少しばかり仕事をし、残りの時間は作曲実践に充てる。ふと書斎のソファを眺めると、昨日行ったポスタープレゼンテーションのポスターをそこに置いていることに気づいた。今後の人生の中で何回ほどポスタープレゼンテーションを行うのかはわからないが、昨日のポスターも含めて、それは一つの形あるものとして記念に取っておこうとふと思った。フローンゲン:2018/2/1(木)19:31

2084. 三つの夢

今日は金曜日。今週最後の平日が新たに始まった。今日は昼の前後の数時間ほど雨に見舞われるようであるが、それ以外の時間帯は曇りのようだ。明日からははいよいよマイナスの気温の世界に入る。明日からは雨が降ることはなさそうなのだが、最高気温は軒並み1度ほどであり、最低気温はマ

イナスとなっている。ここしばらく、あの張り詰めたマイナスの世界の空気と雰囲気を経験することはなかった。明日からの天気は少しばかり新鮮に感じられるだろう。

結局今週の全ての平日において印象に残る夢を見た。今朝も記憶に残るような夢を見ていた。今朝方の夢にはいくつか印象に残っている箇所があるが、最も印象に残っているのは、日本の実家にいる愛犬が小さんてんとう虫となり、雌のてんとう虫を連れて天へ昇っていく姿である。

小さなてんとう虫となった愛犬には意思があり、知性があった。その証拠に、小さな葉っぱを天へ行くための乗り物とし、雌のてんとう虫を別の葉っぱの上に乗せ、相手の乗り物をリードする形で天へ昇っていく光景を見た。

私が感銘を受けたのは、雌のてんとう虫を気遣いながら優しく乗り物を運んでいく姿勢であった。私はしばらくの間その場にたたずみながら、二匹のてんとう虫が小さな葉っぱに乗って天へ昇っていくのを眺めていた。

次の夢の場面では、私はエレベーターの中にいた。これはおそらく宿泊先のホテルか、自宅のマンションのどちらかにあるエレベーターだろう。私がエレベーターに乗り込むと、何人かの人も同時に乗り込んできた。乗ってきた人にどの階に行くのかを聞き、私は彼らが指示する階のボタンを押した。だが、いざエレベーターが動き出すと、どこか様子がおかしい。すると、四階あたりでエレベーターが突然止まった。

単にエレベーターが止まっただけでなく、揺れを伴っており、ずるずると下に落ちていきそうな予感があった。その場にいた全員は、地面に落下することだけを心配しており、その後エレベーターが再び動き出すと、とにかく全員はそこから最も近い階で降りようとした。しかし奇妙なことに、近い階に降りようとしてエレベーターのボタンを押そうとすると、そのボタンが消えるのだ。さらには、自分が最初に目的としていた階にしかそのエレベーターは止まらないようになっていた。

私は自分が降りようと思っていた6階でなんとか降りることができた。6階で降りてから、そのエレベーターがどのようになったのかは定かではない。

そして最後に見た夢は、今は少しばかり断片的な記憶になってしまっている。高校時代にお世話になった国語の教師と、私が直近で行った学会発表の結果について話し合うような夢だった。その学会での発表は、ポスタープレゼンテーションであり、私は当日の発表で用いた大きなポスターを持参して先生の元を訪れた。

国語の教師:「残念だったな、最優秀賞に選ばれなくて・・・」

私:「ええ、ただ最初からそのような賞を取ろうと思って学会で発表したわけではありませんから・・・」

二人のやり取りはそのような会話から始まった。高校の国語の教員であるはずの先生は、なぜだが大学の教授のような個室を持っており、私たちはそこで話をした。

先生の部屋は真っ暗であり、窓の向こうには淀んだ海と濃い灰色の煙を上げる工場の煙突が何本か見える。先生の部屋がどうしてこうも暗いのか理由は定かではなかったが、なんとか先生のシルエットだけは見える。

先生は窓際に立っており、自分の椅子に向かい、そこに腰掛けた。先生のジェスチャーによって、私も先生の近くの椅子に腰掛けた。二人が椅子に腰掛けた瞬間に、その部屋は一つの教室となり、二人の背後には何人かの生徒たちが机に着席して授業の開始を静かに待っている。生徒たちは先生と私の横顔が見えるような形で着席していた。逆に言えば、私たちがそのように座っていたと言えるかもしれない。

先生の背後にある窓からは、相変わらず不気味な煙を上げる煙突が見える。そして、この部屋は一向に真っ暗だ。

しばらく先生と私は自分の学会発表の結果について話をしていたが、そこから話題が変わり、国語を専門としているはずの先生は、精神病理学に関する話を始めた。人間の精神が持つ病的側面について先生が話をし、私はそれに質問を投げかけたり、自分の考えを共有するようなことをしていた。しばらく二人の会話が続いたところで、これまで黙っていた生徒たちの何名かが私たちの会話に加わってくるようになった。そこで夢は静かに終わりを告げた。フローニンゲン:2018/2/2(金)

07:15

2085. 協働プロジェクトより

今日も日が完全に落ち、平日最後の金曜日にも終わりに近づきつつある。今日も今朝から日本企業との協働プロジェクトの仕事を進めていた。

この日記では当然ながら込み入った話はないが、発達科学の知見を活用した人財開発プログラムの開発やコンサルティング業務、そして実証的教育学の知見を活用する形で、トレーニングの効果測定に関する分析やコンサルティング業務などを行うことが多い。

企業社会を含め、様々な領域に身を置くことを通じて、やはり企業社会の独自性とその領域ならではの発達形——発達速度も含む——があることに改めて気付かされる。現在は企業との協働を通じて、そのあたりについて自分なりに問題意識を持って探究を進めている最中である。

学術的な観点では今後はより芸術と人間発達に焦点を当てていくことになるだろうが、実務的な観点では企業社会と人間発達についてより一層探究を深めていこうと思う。この現代社会において、企業社会の占める割合とその影響力の大きさから考えると、それを無視することは私にはできない。企業社会と人間発達については、様々な協働者の方たちと仕事を進めていく中で、新たな問題意識を醸成し、それを探究する形で得られたことをまた書籍なりの形にいつかまとめたいと思う。今日の仕事を振り返りながらそのようなことを思う。

今日は午後からフローニンゲンの街の中心部にある歯医者に出かけた。先日の定期検診の際には、虫歯がなく一安心したが、一方で二本の歯茎に傷があり、その傷がきっかけで今後問題を引き起こし兼ねないとのことだったので治療をしてもらうことにした。確かに、それら二本の歯茎に食べ物が触れるときに少々痛みがあったため、治療をしてもらうにはいい機会であった。

フローニンゲン大学の歯学部を卒業した、いつも担当している歯科医の方に今日も治療をもらった。この歯医者は全般的に全員親切であり、とても親しみやすい。担当してくれた歯科医も例外ではなく、治療後、こちらの興味本位から、どのようにして歯茎の溝を埋めたのかについて尋ねてみた。すると、担当の歯科医は、私の質問に丁寧に答えてくれた。ただし、専門用語が多用されたため、正しくは完全に理解できなかったが、歯茎の性質に近い半液体のようなものを流し込み、それ

を固めたというようなイメージだろうか。歯茎の治療に合わせて、半年に一度のクリーニングを行ってもらった。

治療が全て終わり、歯医者をして大学のカampusに向かっている最中、ふと次回のクリーニングの時期を考えていた。もし仮にアメリカの大学院に秋から客員研究員として所属することになると、次回のクリーニングが最後であり、それは七月中に済ませておく必要があると思った。ここからの半年間もあつという間のような気がしている。フローニンゲン:2018/2/2(金)18:25

No.714: Creating Variations

When I can't spend enough time to compose a new work, I'll create a variation of a previous work. I'm not guaranteed that I have enough time to compose a new piece of music everyday. However, I have strong motivation to compose everyday.

To compensate my feeling, I'll make a variation based on my previous work when I don't have enough time. Creating a variation is also meaningful practice. Groningen, 09:10, Sunday, 2/4/2018

2086. 秋からの研究に向けて

昨日は仕事の関係上、あまり文章を書き留めておく時間がなかった。というよりも、私がそうした時間を意識的に作ろうとしなかったのかもしれない。いずれにせよ、普段よりも日記を執筆する量が少なかったことは確かである。また、以前に仮説として持っていたように、内面現象を言葉として形にする量が少ないと、どうやら次の日の朝にその影響が現れるという関係性が見えてきた。

文章執筆を通じた心身の整理を行わなければ、どうも次の朝の目覚めがすっきりしない。今朝はそのような形で目覚めた。

今日は土曜日であるから、自分のなすべき事柄をゆっくりと進めていくことにしたい。来週から開始する研究プロジェクトに加えて、今年の秋から米国の大学院で始めようと思っている研究の計画書を執筆する必要がある。それは年末に一度簡単なドラフトを作っていたのだが、今日と明日にかけ

てそのドラフトを練り直したいと思う。年末から今日にかけての一ヶ月の間に、研究の内容が少しばかり変更になった。

秋からもMOOCに関する研究を継続させる予定だが、そのコンテンツとしては音楽に関するものを扱いたい。そしてこの研究を転換点として捉え、そこから芸術と人間発達の研究に大きく舵を切りたいと思う。本音としては秋からすぐにも芸術と人間発達についての研究を行いたいのだが、オランダで積み重ねてきたことがオンライン学習の研究であるという都合上、これまでの経験を活かした計画書を執筆する方が賢明だろう。

秋からの研究では音楽、とりわけ音楽理論のMOOCを題材にしようと思っており、学習者がMOOCを通じていかに音楽理論を習得していくのかという、MOOCが学習プロセスと学習成果に与える影響について研究をしたいと思う。

音楽理論に関する領域固有の知識が必要になるため、研究を進めていく上で音楽理論に造詣の深い教授からの支援を受けようと思っている。今回の研究では、発達科学や教育科学の分野の教授というよりも、音楽学科の教授と協働して研究を進めていくことになりそうだ。

提出予定の研究計画書は、来週からフローニンゲン大学で行う研究の計画書をもとに作成していく。データの収集方法やデータ分析の手法についてはほとんど同じであるため、以前の研究計画書を活用することができる。ただし、音楽教育とMOOCに関する現状についてももう少し調べる必要があり、できれば既存のMOOCと音楽教育をテーマとして取り上げている先行研究にはどういったものがあり、どういった観点が欠けているかを明らかにしておきたい。

今日の午前中と明日を活用してドラフトを洗練させていく。提出の締め切りは今月末であるため、あとひと月ほどの時間がある。とはいえ、早めにドラフトを完成させておき、文章を寝かせ、締め切り前に数回ほど文章を確認することを行いたい。フローニンゲン:2018/2/3(土)07:30

No.715: An Elegant Flow

A flowing flow and an unflowing flow. A flow will be flowing and unflowing. Such a flow is elegant.

Groningen, 10:53, Sunday, 2/4/2018

2087. 就寝前に

今朝方起床した時に、今日は土曜日ではなくまだ平日のような気がしていた。平日でも休日でも基本的に私のやることや生活リズムはほとんど変わらないのだが、今朝は仕事をする必要性に対する意識が強く働いていた。ただし、それはプレッシャーのような強いものではなく、自分の中で仕事に対する意識がいつも以上に顕在化していたということである。

現在は他者の成長支援に直接関わる仕事にも従事しているため、支援者側の心身の状態がいか
に充実したものであるかは重要になるだろう。その辺りを肝に銘じながら日々の生活を送っていく。

昨夜は就寝前に、個と他者との関係性、そして個と普遍性との関係性について考えていた。ベッドの上で仰向けになっていると、それらのテーマについての考えが自然と浮かんできた。

一人の人間が自らの内面世界をどこまでも深く探求し、開拓をしていった先にはどのような領野が開かれるのか、そしてそこではどのような光景を目にするのか、ということに自らの関心が向かっていることがわかる。その関心は以前から強くあったものだが、昨夜もその関心が自己の内側に強く根ざされていることがわかった。この関心は私を捉えてやまないものであり、それによって私は突き動かされるように日々を生きているように思う。

個という一点を掘り下げて探求していくことは、物理的に現在の自分の立っている地面をどこまでも深く掘っていくことに似ているのではないか。そのようなことをふと思った。

現在立脚している地面を掘り進めていけば、地球の核にぶつかるはずである。それを一人の人間の内面世界に置き換えて考えてみた時に、地球の核に該当するものがどういったものなのかを知りたいという思いが強くある。それは究極的な点としての自己かもしれない。では、果たして究極的な自己とはいかような性質を持つものであり、それに至った時に、現実世界に対する認識はどのようなものに変容するのだろうか。

そのようなことを考えていた。そこからさらに、地球の核に該当するものは、単に一人の人間の究極的な自己かもしれないという可能性のみならず、それこそが人間存在が持つ普遍的なものなのかも

しれないという考えも浮かんできた。これは以前からの考えと同様かもしれないが、やはり究極的な自己に向かっていく道は普遍性に至る道なのだろう。

アスファルトの地面を素手でひたすらに掘り続ける自分の姿がまぶたに浮かんだ。

一人の個の内面世界をどこまでも掘り下げていった時に、何が見え、何が見えないのか。そうした探求を愚直に継続させていくことは、自分の大切なライフワークである、ということを考えながら就寝に向かっていた。フローニンゲン:2018/2/3(土)07:58

No.716: The Jean Piaget Society 2018 Conference in Amsterdam

I got happy news that I was accepted for a presentation in the 48th conference of Jean Piaget Society. This will be my second conference presentation. The topic of my presentation is dynamic processes of online adult learning. It is based on my master's thesis last year. I look forward to this three-day conference in the end of May.

I'm still waiting for the application result of another conference; The International Society of the Learning Sciences (ISLS) 2018. Groningen, 12:42, Sunday, 2/4/2018

2088. 壮麗な雪景色

起床直後から雪がパラパラと舞っていたのだが、突然雪が激しく降り始めた。私はしばらく書斎の窓のそばに立ち、雪の降る様子を静かに眺めていた。雪が積もり始めた地上を眺めるだけでなく、雪が舞い落ちてくる空の方も仰ぎ見た。

一粒一粒の白い雪が次から次へと地上に落ちてくる。その光景は静かな陶酔感を引き起こし、私はぼんやりと、天から舞い落ちる雪だけを眺めていた。

天から地上に降り注ぐ雪は溶けずに積もり始めている。一方で、雪を眺める私の自我は溶けてしまいそうであった。実際に、私の意識は不思議な瞑想状態に入り、雪が舞う光景に潜む意識の変容作用を体験する当事者となった。

天気予報の通り、今日からしばらくマイナスの世界が続くようだ。来週の月曜日から研究インターンが始まり、歩いて30分ほどのザークキャンパスのオフィスで勤務することになっている。月曜日に自宅を出発する時間帯はマイナス1度という予報が出ており、久しぶりにマイナスの気温の世界を歩くことになる。今日は雪景色を眺めながら日々のなすべき事柄、すなわち自分のライフワークの一端を着実に前に進めていこうと思う。

あっという間に辺りの景色が白銀世界に変わっていく中で、ふと今朝方の夢について思い出した。夢の中で私は、実家にいる愛犬と一緒に公園で遊んでいた。

自宅の玄関を開けていざ公園に行こうとすると、愛犬にリードを付けていなかったため、愛犬は一気に階段を駆け下り、外へ飛び出して行った。勢いよく飛び出していった愛犬を非常に心配したが、彼は公園の真ん中で大人しく待っており、尻尾を振りながら私の到着を待っていた。そこから愛犬と私は公園での遊びを始めた。

テニスボールよりもひと回り小さいボールを投げ、それを地面に落とさずにキャッチするという遊びを行った。もし地面に落とさずに見事にキャッチすることができたら、ご褒美としておやつを一粒あげるルールになっていた。

私が一投目を投げた時、それは大きな放物線を描くことなく、かなり直線的な軌道を描いてしまい、それを地面に落とさずにキャッチすることは不可能であった。一投目の反省を踏まえて、二投目は大きな放物線を描くように遠くの方へボールを投げた。すると愛犬は見事にそれを地面に落とさずにキャッチした。ボールをくわえて嬉しそうにこちらにやってくる愛犬の頭を撫で、おやつを一粒与えた。

実は一投目の後に、自宅の窓から父の声が聞こえ、「今の投球では地面に落とさずにキャッチするのは不可能だろう」という指摘があった。私はその点について自分でも承知していたため、その助言が大変煩わしく思った。私はかなり邪険な態度で父の助言に対して反応したが、結果的に二投目は、一投目とは大きく異なる投げ方をすることになった。

この遊びに熱中していると、愛犬よりも私の方が疲労をしてきたため、そろそろ引き上げる決意をし、最後の一球を大きく投げた。最後の一球に関しては、ちょうど背の高い草の中に愛犬が入ってしまう

たため、うまくそれをキャッチできたのか定かではなかった。だが、最後の一投に対してもご褒美のおやつをあげた。実は愛犬が公園に入る時、公園の隅で糞をしていたため、それを片付けて自宅に戻ることにした。

しかし、トイプードルの愛犬の大きさからは考えられないほどの大きな糞が四つほどそこにたたずんでいた。おそらく食事の摂り過ぎが原因であると考えられ、「きっと母と私が見ていないところで、父がおやつをこっそり与えて手なずけようとしたのだろう」と思った。

私:「うそ～、こんなに出したの？四つも全部持って帰れないんだけど・・・」

愛犬:「・・・」

私:「こっちで二つ持って帰るから、半分は自分で持って帰ってくれる？」

愛犬:「ワン！（了解です！）」

結局四つの糞のうち、半分ほど私が持ち帰り、もう半分は愛犬自身に持ち帰ってもらったことにした。糞の分担をし、自宅に向けて公園を離れた瞬間に夢から覚めた。

相変わらず雪が舞い落ち続けている。幸いにも風はなく、天から真下に降り注ぐ雪はとても美しい。この雪景色の中にあって、姿は確認できないのだが、小鳥の鳴く声が聞こえて来る。高らかに鳴く小鳥の鳴き声に耳を傾けながら、今日の活動を今から本格的に開始させようと思う。フローニンゲン:
2018/2/3(土)09:13

No.717: Finalization of a Research Proposal

I finished writing a research proposal for the application of a visiting fellow position at an American university. If I fortunately get admitted to it, I can expand my research domain from developmental and educational science to music.

I already contacted some faculty members at the university to collaborate with them. I anticipate the collaboration with them and auditing their courses. Groningen, 20:18, Sunday, 2/4/2018

2089. 天気の状態特性

今日は夕食前に全ての仕事を終えることができた。研究に向けての文献調査をし、秋からの研究に関する計画書のドラフトも八割型完成させることができた。この計画書に関しては、明日にでも最後の項目の部分に関する文章を執筆しようと思う。明日にドラフトを完成させてからしばらく寝かせ、最後に何度か読み返す形で最終稿としたい。

今朝は朝から雪が激しく降り、地面は真っ白な雪で覆われていた。しかし、昼食前には雪がピタリと止み、午後からも雪が降ることはなかった。そのおかげもあり、今はすっかり地面の雪は溶け、辺りは再び雪が降る前の姿に戻っている。ただし、明日からもマイナスの世界であることに変わりはなく、寒さは予断を許さない。

それにしても今日のように激しい雪が降ったかと思いきや、再び雪の降らない穏やかな天気に戻る姿を見るにつけ、天候の移り変わりの激しさを改めて知る。天気というのは変動の激しい状態であるにつくづく実感する。天気は段階特性を持たず、その変化は常にかりそめのものである。その点において、天気は意識の状態と似ており、意識の段階とは別物だと言えるだろう。昼食時に食卓の窓から外を眺めていた時に、そのような天気の状態特性について考えていた。

今日は無事に全ての仕事を早めに終えることができたので、夕食後からは福永武彦氏の小説をゆつくりと読もうと思う。全集の第三巻の最初の作品『遠方のパトス』を読み進める。これは短編であるから、続けざまに『時計』と『水中花』まで読み進めることができるかもしれない。九時までをめぐりに小説作品を読み、そこから就寝前の時間には作曲実践を行う。

今日ほどの作曲家に範を求めようか迷うが、本日はバッハの作品を参考に作曲実践に取り組みたいと思う。明日も今日のような日になってくれるだろうか。学術研究、企業との協働プロジェクト、読書、作曲実践、それらに従事することを通じて、一つの日曜日が終わりを迎え、新たな週へと橋渡しをしていこう。フローニンゲン:2018/2/3(土) 18:30

No.718: After Forlornness

A new week has begun from today. I anticipate that some new events will happen this week.

2090. 一步一步の歩み

今朝はとても穏やかな天気である。昨日とは異なり、今日は雪が降ることはないようだ。確かに最低気温はマイナスであり、外気は冷たいことは間違いないが、どこか昨日よりも穏やかな印象を放っている。それはおそらく、遠くの空に晴れ間が見えるからかもしれない。

先ほど天気予報を確認して驚いたが、来週は一週間を通じて晴れの日が続くようだ。晴れマークが七つ連続して並ぶことなどここ最近は一切なく、というよりも、フローニンゲンの街でそのようなことは年間を通してほとんどないと思われる。

ちょうど明日からフローニンゲン大学のMOOCチームと共に研究を行うインターンが始まるため、来週の天気が良いことは幸先の良いスタートを暗示しているように思える。明日は早朝からマイナスの世界を歩いてオフィスに向かうことになるが、その足取りはきっと晴れやかなものになるだろう。そして、その一步は今後の自分に向けた確かな一步になるはずだ。

昨日、改めて一步一步の歩みの重要性について思いを巡らせていた。とにかく毎日一つ一つの仕事を積み重ねていく。人に見られていようが見られていまいが関係なく、さらには自分ですらもそれを見ているかどうかに関係なく、とにかく愚直に毎日小さなことを絶え間なく続けていくのである。

毎日文章を書き、文章を読み、そして曲を作る。人間存在に関するメモを絶え間なく書き留めていく。自分の内側で少しでも形になろうとした思念と感覚の全てを把握し、それに形を与えていくのである。与えた形が不完全であっても一向に構わない。完全な形など最初から存在しないのであるから。

内側の目には見えないものをとにかく言葉や音を媒介にして形象化させていく。突き詰めて言えば、自分の仕事はそれだけであり、それ以上のことなど私にはできないであろうし、それ以外のことに従事しようとは一切思わない。内的現象の形象化こそが自分のライフワークである。

昨日も過去の偉大な作曲家が残した楽譜を少しばかり眺めていた。すると、彼らをもってしても、一つ一つの曲は一見すると完結されたものであったとしても、それら一つ一つの曲の総体、つまり作曲家自身の芸術は完結していなかったことを知る。そうであれば、彼らが残した一つ一つの作品というも、彼らの歩みや存在を映し出す「メモ」のようなものなのではないかと思えてきたのである。

「ああ、やはりメモなのだ。メモを残すことが進むことであり、深めることなのだ」という新たな確信を得る。文章としてのメモ、曲としてのメモを今日も残し続けていく。明日がやってくるのなら、明日もそうだ。フローニンゲン:2018/2/4(日)09:24

No.719: Beginning of Internship

The first day of my internship has started from today. I arrived at my office. The room is very decent, and I intuitively think that this room enables me to concentrate on my research.

One of my colleagues told me where I can get coffee and lunch. Thus, I don't have any concern about working here.

Let's begin my internship. The first thing I want to is to make a new schedule for this internship.
Groningen, 09:57, Monday, 2/5/2018

2091. ほとばしるエネルギーと秋からの研究について

爽快な青空が姿を現し始めた。時刻は日曜日の午前九時半に近づいている。

今日はいつもよりゆったりと起床し、七時前に起きた。実は昨夜に少し調べ物をしていた関係上、三十分以上遅くの就寝となり、目覚めの質について懸念があったが、そんな懸念が嘘であるかのようになり心身の状態がいい。一方昨日は、十分な睡眠を取っていたはずなのに早朝の時間帯はどうも心身の調子がパツとしなかった。私はそれを吹雪のせいにしようとしていたが、果たして昨日の朝の心身の状態はなんだったのだろうかと思ってしまう。いずれにせよ、今朝は何か自分の内側で弾けたものがあったかのように、みなぎるものを感じることができる。今日はこのほとばしるエネルギーの中で一日の活動を行っていきたい。

昨日の段階で、この秋から所属予定の米国の大学院で行う研究に関する計画書のドラフトをほぼ書き上げた。残すところは、具体的にどの教授とどのような形で協働をしていくかという箇所である。

昨年 of 年末の段階ですでに協働依頼を何人かの教授に行っており、一緒に研究を進めたいと思う全ての教授から好意的な回答を得られた。主には全く専門の異なる三名の教授と協働を進めたいと思っている。一人目は、音楽学部 に在籍している音楽理論の専門家である。秋からの新たな研究は引き続きMOOCを扱いながらも、コンテンツとしては音楽に関するものを扱おうと思っている。中でも、MOOCの受講生が音楽理論に関する概念的 understanding をどのように発達させていくかについて今回の研究では焦点を当てていきたい。

確かに現在私は自分の作曲実践の都合上、音楽理論についても学びを深めているが、それは全くもって素人の域を出ない。研究上、音楽理論の概念的 understanding を自分自身でも高めていく必要があり、同時に、データを定量化する際に専門家の意見を取り入れようと思っていたため、その教授に協働の依頼をした。

もう一人は、統計学科 に在籍している時系列データ分析の専門家である。その教授はフランス人であり、年はまだ若い。現在取り組んでいる研究に引き続き、秋からの研究でも時系列データ分析は必須であり、そこではさらに高度な分析をしていきたいと思っている。また、私はそうした高度な分析の理論と手法を身に付けたいという考えを持っているために、その方の指導を受けることにした。

最後に、三人目の協働者としては、MOOCに関する研究の専門家にも協働依頼を打診した。その方は教育学部 に在籍しており、彼の専門性は自分の専門性と最も近いため、研究デザインや進め方に関しては一番話がしやすいかもしれない。

ちょうど三人はそれぞれ、各々の所属学部でコースを受け持っており、仮に私がその大学院に所属することになったら、彼らのコースを聴講しても良いことになった。その際には、「音楽理論概論」「時系列データ分析」「MOOCと教育研究」の三つのコースを履修したいと思う。客員研究員として上記の研究を行っていくことに並行して、この研究からさらに次の研究につなげていくためにも、美学に関する理解を深めていきたいと思っている。そのため、美学に関する哲学科のコース、あるいは芸術理解に関する哲学科のコースを受講したいと考えている。

今日は応募書類のドラフトの最終版を作成することを最優先させたい。フローニンゲン:2018/2/4
(日)09:41

No.720: Completion of the First Task

I'm listening to Mozart music in my internship office. The music soothes my feelings and sharpens my thoughts.

I started to make a new schedule for the internship—what I'll do in each day—, I just finished the draft already. I thought that it would be wonderful if I could finish it before lunch, but I've done it before 10:30. Since I have ample time today, I'll begin to start my research project.

The first task is to make a list for the course relevant concepts of the targeted MOOC in order to quantify the data. It may be possible to complete this task by the end of today. Groningen, 10:27, Monday, 2/5/2018

2092. 気づきの意識と自己の基底

ここ最近のことなのだが、毎日が新たに始まることが不思議ではない。さらには、再び自分として一日が始まるのが不思議で仕方ないのである。そのような感覚に見舞われたことはないだろうか。朝目が覚めた瞬間に、再び自分が自分として活動をし始めることの不思議さ。

夢を見ない深い眠りの意識の中で、今この瞬間に自分が自分だと思っていたその自分はどこにいたのだろうか。私たちの内側にはこの自分のさらに深い場所にいる自己の存在があるはずなのだが、なかなかそれに気づくことは難しい。いつか私はそれを「自己の基底」というような言葉で表現していたように思う。

今この瞬間に自分が自分だと思っている存在は、確かに自分なのだが、それは自己の一側面ではなく、自己の基底とはかけ離れた存在である。

気づきの意識によって気づける自己の向こう側にいる自己に気づく必要がある、というのもまたおかしい話である。究極的には、この気づきの意識さえ溶解させなければならない。

何かに気づく自分を滅却した時に初めて、自己の基底が顔を覗かせる。本来は、私たちが何かに気づいているこの瞬間にも、常にすでに自己の基底はそこにいるのである。だが、私たちはそれに気づかないし、気づけない。気付こうとする意識が妨害になっているのである。

気づきの意識の向こう側にある意識こそが、自己意識であり、それが自己の核であろう。今このようにして諸々の事柄に気づいている私の向こう側に、私の核たる自己がいる。

兎にも角にも文章や曲として、気づきの意識を形として具現化させることに従事していると、時に自己の核が顔をのぞかせることがあるから不思議である。

今から七年前にカリフォルニアのジョン・エフ・ケネディ大学で「ダイヤモンドアプローチ」という自己探求技法に関するクラスに参加していた時、エクササイズとして一つ面白いものがあった。それは誰かとペアになり、片方の人はもう片方の人に同じ質問を投げかけ続ける。その質問とは、「Who are you? (Who are you exactly?)」であった。

意識をすると、「あなたの本質は何ですか？」とでも言い換えることができるだろう。その質問に対して話し手は何か答えを述べる。しばらく自己を定義づける言葉を話し続け、回答が終わったところで、聞き手は再び同じ質問をする。それが数十分ほど延々と繰り返される。

このエクササイズは大変印象に残っている。私は言語的な意味で自らを規定する回答を次々と述べていった。しかし、あるところで私の回答はピタリと止まった。

言語で自らを規定する境界線に達したのである。そこから先は言語の及ばない世界が広がっており、私にできた唯一のことは、沈黙することだった。

沈黙。もしかすると、それが自己の基底に近づく最良の手段なのかもしれない。もう少し丁寧に言えば、徹底的なまでに自己に気づきの意識を与え、言語的な形で自己の基底に接近し、そこから先は沈黙の波に乗っていくのである。気づきの意識による定義を徹底的に行うことによって、自己の基底に向かう力を生み出し、あとは慣性の法則を活用するかのように、沈黙の波によって自己の基底にまで運ばれていくことを待つのみなのかもしれない。

おそらく今日もまた自分としての一日が始まった。一日と自己の新たな始まりに気づくとき、その気づきの意識が芽生えた直後に、自己の基底を垣間見る。フローニンゲン:2018/2/4(日)09:41

No.721: Revised Internship Schedule

This is the first day of my internship. My first task was to make a new schedule of the internship. I made an Excel file to clarify what I will do during the internship. Basically, I plan to focus on two types of work: (1) participating in meetings and events about MOOCs as many as possible, and (2) conducting my research on MOOCs. The former would expand my knowledge about MOOCs, in particular how to develop a new MOOC. The latter is important for completing my master's thesis.

Applying my quantification criteria to the data of a specific MOOC would be a beneficial opportunity to elaborate the criteria. I will do my work based on the new internship schedule.

Groningen, 17:03, Monday, 2/5/2018

2093. 変奏曲

今日は早朝からバルトークの作品だけを聴いている。一方で、昨日はモーツァルトが残したピアノ変奏曲をずっと聴いていた。

「変奏曲」という存在は前から気になっており、それについて改めて昨日調べていた。バッハの変奏曲はとて有名であり、これまで何度も聞いていたのであるが、モーツァルトとベートーヴェンが残した変奏曲はそれほど繰り返し聴いてこなかったことに気づいた。

現在私は、基本的に毎日作曲実践の時間を設け、内的現象を毎日一つ曲として残すことにしている。しかし、当然その日の他の仕事との兼ね合いから、十分に作曲実践に時間を充てることができず、毎日一曲作れないことがあるのも確かである。そうした状況にあっても、何かしら毎日一つ曲を残し、その日に自分がこの世界に存在していたという記録を残すためにはどうしたらいいかを考えていた。そこで浮上したのが、変奏曲を作っていくということである。

仮に一日の中で、新たな曲をゼロから作ることが難しければ、過去に作った曲を基にして変奏曲を作っていくのはどうか、と思ったのである。もちろん、変奏曲を作る際には、これまで自分が試したことのない理論や技術を積極的に活用していく。

「全ての作品は実験過程の産物である」と述べたピカソと同様の発想を持って、変奏曲を作る過程の中で様々な実験を試みていく。変奏曲を作る場合には、もしかすると完全に実験的な意識を持っていいかもしれない。それを作る前に、その曲の中で実験したい事柄をあらかじめ作曲ノートに書き留め、少なくともそれらを試していく。そうすることによって、作曲技術がまた広がりと深みを見せていくだろう。さらには、事前の仮説を検証するような形で実験を行うという態度を忘れないようにする。実験というのはやはり仮説がなければ意味がない。

仮説があり、それを検証しようとする最中に思ってもいなかったような発見をすることがあるが、そうした発見はやはり、事前の問題意識である仮説が呼び込むものだろう。今日からは、一日の間に時間がなかなか取れなければ、変奏曲を作ることを心がけていく。逆に時間的にゆとりがあるときには、新しい曲を一日に一つと言わず、二つや三つ作っていく。そのような方向性で今後しばらくの作曲実践を行っていこうと思う。

変奏曲への関心が高まったことに付随して、バッハの変奏曲の楽譜のみならず、モーツァルトやベートーヴェンの変奏曲の楽譜も参考にしたいと思った。そこで早速英国のアマゾンと米国のアマゾンを比較する形で、モーツァルトとベートーヴェンの変奏曲の楽譜を購入した。結果として、英国のアマゾンよりも米国からオランダに送ってもらう方が送料を含めても割安であったため、今回の注文は全て米国のアマゾンを経由して行った。いつも思うが、米国のアマゾンの品揃えは素晴らしく、価格も世界のどのアマゾンよりも安い。

研究や作曲実践を進めていく際に、どうしても書籍が不可欠であるため、とても些細なことであるが、書籍を大量に割安で購入するという観点において、米国に住むことの方が私には合っているような気がする。フローニンゲン:2018/2/4(日)10:28

No.722: Reflection on the First Day of Internship

In the morning, I had a meeting with a support staff about data-usage and confidentiality.

Since MOOCs involve private information, confidentiality is a crucial matter.

I signed a contract, thus I can start data analysis. After signing a contract, I began my individual research. This research is closely connected with my master's project. Before conducting data analysis, I had to quantify the transcript and learners' online comments.

Strictly speaking, I needed to make criteria for the quantification. Therefore, I worked on making standards to quantify the qualitative data. One of the quantification criteria is “course relevant concepts.”

A lecture always introduces some important concepts. I listed up these kinds of key concepts based on the overview of each lecture and a study goal of the course. It took three hours to complete the list from the first week lectures to the seventh week ones.

Because some concepts are duplicated, I will eliminate the overlapped concepts on Friday. It is the next task. Groningen, 17:16, Monday, 2/5/2018

2094. 国際ジャン・ピアジェ学会での発表決定

今日は雪は降らないと思っていたが、昼食を一口食べ始めた時に突然雪が降り始めた。昨日のように激しく雪が舞っている。

雪の舞う景色を眺めながら昼食を摂り、全て食べ終わる頃には雪は止んでいた。通り雨ならぬ、通り雪なるものがフローニンゲンの街を通り過ぎていった。

早朝は清々しい青空を眺めることができたのだが、雪が降って以降はうっすらとした雲が空全体を覆っている。心を弾ませるような天気では決してなく、どこことなく気持ちを静かにさせ、エネルギーを内側に沈めていくような天気だ。そんな天気の中、昼食を摂り終えた私はメールを確認した。すると、今年の五月末から六月にかけて、アムステルダムで三日間開催される国際ジャン・ピアジェ学会の担当者から連絡があった。

メールの一行目を読むと、学会での発表が受理されたというお祝いの文章が記載されていた。この文言を読んだ途端、自然と喜びが込み上げてきた。

学会発表に応募し、それが受理されるというのはとても小さなことかもしれないが、今の私にとっては自分の研究成果を他の経験豊富な研究者の前で発表できることほど有り難い機会はない。

昨年の三月にザルツブルグで国際非線形ダイナミクスの学会に参加した時、「二度と聴衆として学会などに参加しない。参加するのであれば必ず発表者としてである」という思いに駆られて以降、学会に参加する時は情報の消費者ではなく、一つの研究という表現物を発表する者、つまり生産者として学会に参加しようと誓ってきた。そうした誓いを立てて以降に応募した初めての学会で発表の機会を得ることができ、大変嬉しく思う。国際学会で発表を行うのは、今から二年前の横浜での国際心理学会議以来のことであり、私にとっては今回が二度目のことになる。

今回の学会は、私の専門性と完全に合致しており、研究テーマも学会の趣旨に完全に沿ったものであったことが発表機会の獲得につながったのかもしれない。今回発表する研究では、カート・フィッシャー教授やポール・ヴァン・ギアート教授の理論、さらにはトム・ホルンシュタイン教授が開発した分析ツールを活用している。彼らは全てこの学会の重要人物であったことも、今回の発表機会の獲得につながっているかもしれない。

フィッシャー教授はおそらく毎回この学会に参加していたと思われ、すでに引退をしまっているために今回の学会で久しぶりに会うことができなくて残念である。ただし、ヴァン・ギアート教授と会う機会、そして昨年にフローニンゲン大学でワークショップを開催してくれたホルンシュタイン教授と久しぶりに再会できることは嬉しく思う。

五月末まで後四ヶ月ほどあるが、その日はあっという間にやってくるだろう。会場はアムステルダムであるが、移動距離を考えると、学会中はアムステルダムに宿泊した方が良さそうだ。およそ二年ぶりにアムステルダム市内に宿泊し、久しぶりにゴッホ美術館に足を運んでみたいと思う。

この学会の後に、六月末にロンドンで行われる国際学習科学学会にも発表の応募をしており、その結果も今月中にわかるそうだ。こちらの学会でも発表ができる機会を得られたら幸いだ。静かにその便りを待ちたい。フローニンゲン:2018/2/4(日)12:59

No.723: Reflection on Internship and DFA

I got up before six, and I started today's work just after six. Reflecting on the internship that began from yesterday, I still have to make criteria for quantification. Whereas I made one criterion yesterday, I need to make another. Once I create two criteria, I can start to conduct data analysis.

Although I plan to apply detrended fluctuation analysis (DFA), I just realized that I was not so familiar with the details of the technique. I'll read again some articles about DFA to understand the underlying principle. My knowledge on DFA is still elementary. Groningen, 06:28, Tuesday, 2/6/2018

2095. インターン開始の朝より

今朝は六時に起床した。今日から二つのことが始まる。一つ目は、今日から来週の月曜日まで晴れの日が続くということ。そして二つ目は、研究インターンがいよいよ始まるということだ。

今日は起床と同時にシャワーを浴び、心身を早めに目覚めさせた。インターンを行うオフィスは、自宅から歩いて30分弱かかる。近くの河川敷のサイクリングロードを歩き続けるとそこに到着する。ものを考えながら歩いていると30分というのは本当にあつという間である。

今日から天気の良いことを考えると、オフィスまでの通勤は早朝の散歩として非常にふさわしく、この散歩がまた心身を整えてくれることにつながるだろう。インターンのスーパーバイザーであるジャン・ディエナム博士から、勤務時間については私が決めて良いと言われている。基本的に月曜日と金曜日にオフィスで研究することにし、フローニンゲン大学のMOOCチームのリーダーを務めているトム・スピッツ氏に先日送ってもらったリストを確認しながら、各種重要なミーティングに参加する予定である。

今日が勤務初日であるから、まずは自分のオフィスを少しばかり整えることをしたい。おそらくオフィスの確認と整理をし、少し一息入れたところで、分析データの取り扱いに関する説明を担当者から受ける時間となるだろう。そこで説明を受け、契約書にサインをしたら、実質上はそこから自分の研

究をいつでも開始できることになる。ただし、今日はまずこの二ヶ月ほどのインターンの大まかなプランニングを改めて行う。スピッツ氏から送ってもらった会議やイベントのリストを眺めながら、自分の研究のスケジュールと合わせて新たなスケジュールを作成する。それを昼食前から昼食後にかけて行う。

そういえば、今日から勤務するザーニクキャンパスの近辺にはレストランはあるのだろうか？という些細な点が気になる。キャンパス内のカフェテリアを使うか、近くにスーパーがあればそこで昼食を購入してもいいだろう。とても些細な点だが、この点についてもスピッツ氏か誰かに聞いてみようと思う。

昼食後に新たなスケジュールを組むことができれば、早速研究のためのデータ整理に取り掛かりたい。まずはある基準に基づいてデータの定量化に関するリストを作ることに着手したい。すでにその案は、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授と練っており、その基準を用いてリストを作成していく。今回研究で取り扱うMOOCは七週間に及ぶものであり、データ量も多いため、インターンの初日はそのリスト作りで終わるだろう。もしかしたら今日中にリストを完成させることができないかもしれないため、残った分は金曜日に改めて作成する。

今日の勤務の最後の一時間ほどは作業の手を止め、「リフレクションジャーナル」の執筆に時間を充てたい。これもまたインターンとしての一つの仕事であり、今回のインターンの最終成果物であるレポートを作成する際にも重要な情報源になる。

今日から新しい環境で研究に打ち込めるというのは新たな刺激になるだろう。インターンの開始に期待感が高まっている。フローニンゲン:2018/2/5(月)07:18

No.724: Half Moon Undulation

I can see a half moon in the sky in the early morning. The undulation of the light seems to have something profound and mysterious. Groningen, 07:54, Tuesday, 2/6/2018

2096. 連日連夜の夢

先週の五日間に引き続き、結局今朝方も印象に残るような夢を見ていた。夢の中で私は、小中学校時代の友人三人と、東京から博多に向かう新幹線に乗ろうとしていた。私は新幹線の駅に早めに到着し、三人を待っていた。しばらくすると、二人の友人が顔を見せた。

そこで少しばかり立ち話をしていたが、いつまでたっても、もう一人の友人が姿を見せない。私はすでに新幹線の指定席の切符を購入しており、乗車予定の新幹線はすでに駅構内にいた。

私:「そろそろ出発の時間が近づいてるんだけどなあ」

友人A:「そうだね、でもまだCが来てないからなあ」

そのような会話を一人の友人と行っていると、ようやく最後の友人が姿を現した。その時の時刻は、新幹線の出発の三分前だった。

友人C:「ごめん、待たせたね！」

私:「今からだったらまだ間に合うかもしれない。走ろう！」

私はそのように述べ、友人三人と走って新幹線が待つプラットフォームに向かった。ちょうど私たちが新幹線の前に到着した瞬間、その新幹線はドアを静かに閉め、ゆっくりと出発してしまった。

私たちは出発した新幹線の背中をその場で呆然と眺めていた。

友人B:「逃しちゃったね」

友人A:「そうだね。自分も指定席を購入してたんだけど・・・」

私:「ちょっと駅員さんに聞いてみよう。無理かもしれないけど、この切符を次の新幹線の切符に変えてもらおう」

私がそのように述べると、偶然私たちの目の前に一人の駅員が立っていた。そして一言述べた。

駅員:「ええ、その切符を次の新幹線の指定席券に変えることは可能ですよ。あちらの窓口でお手続きください。」

その言葉に四人は救われたような思いになった。無事に切符を交換し、次の新幹線を待つために待合所に向かったところで夢の場面が変わった。

そこからの夢については内容を覚えていない。確かに夢の場面が切り替わり、次の夢が始まったことだけは覚えている。かすかに覚えているとすれば、それは日本で働いていた時のオフィスが現れる夢であった。そこで自分が以前の仕事に取り組んでいるような光景が少しばかり記憶に残っている。

それにしても、先週から今日にかけて印象に残る夢が出現し続けている。これは自分の内面世界のどのような状態を示唆しているのだろうか。夢を見る条件のようなものは、今のところまだ私にとって未知である。この点についても関心を持ってみようと思う。

果たして今夜は夢を見るであろうか。フローニンゲン:2018/2/5(月)07:38

No.725: Slow Breathing

I often pay attention to my breathing in a conscious way. Also, I often experiment changing the rhythm and slowing it down. Since I've practiced it for a long time, I notice that the speed of my breathing has been slower and slower in my daily life. It probably may have some influences on my brain and body. I'll continue to practice it to make the speed of my breathing as slow as possible because slow-going breathing seems to enrich the quality of my life. Groningen, 20:50, Tuesday, 2/6/2018

2097. インターン先のオフィスから

朝の九時に自宅を出発した時、外の気温は0度であった。出発前に温かいコーヒーを飲んでいたので、外に出た時にあまり寒さを感じなかった。

気温が0度とマイナス1度は随分と異なる体感を与えるのだということを昨年知った。今朝の気温は0度であったから、マイナス1度の時のようなあの張り詰めた寒さを感じることはなかったのだろう。

自宅を出発して、少し早足で30分ほど歩き、今日から始まる研究インターンのオフィスに到着した。場所は、普段私が足を運んでいる社会科学キャンパスではなく、ザーニクキャンパスと呼ばれる場所である。

今日から始まるインターンでは、基本的に月曜日と金曜日の週に二日ほど働くことになっている。勤務時間は自分で決めることができ、一応私は九時半から夕方の五時半まで勤務しようと思っている。

ザーニクキャンパスに到着し、まず私は、研究に専念できるようにジャン・ディエナム博士が手はずを整えてくださった自分のオフィスに向かった。今日はインターン初日であるから、アシスタントのアニケのオフィスに立ち寄り、部屋の鍵をもらった。今日からインターン終了までこの鍵を預かり、基本的にはいつでも自分のオフィスで仕事ができるようになった。

アニケから鍵を受け取り、早速自分のオフィスに向かった。自分のオフィスの隣には、エステル・ボウマ博士の部屋がある。どうやらボウマ博士は、別の同僚と部屋を共有しているらしく、私が自分のオフィスに到着すると、隣の部屋に明かりが灯っていた。隣の部屋に顔を覗いてみると、一人の職員がそこで仕事をしていた。彼女の名前はキャロリンといい、彼女はデータアシスタントとして働いているようだ。

お互いに自己紹介をし、しばらくお互いの仕事内容について話をしていた。一つだけとても些細な懸念事項があり、オフィスのあるこのビルのどこでコーヒーを購入することができるのか、さらには昼食を摂るためのカフェやレストランでお勧めの場所は近くにあるかどうかを尋ねた。するとキャロリンから、コーヒーの購入場所のみならず、昼食を摂ることのできるレストランをいくつか教えてもらった。今日は教えてもらった場所のどこかで昼食を摂ろうと思う。

キャロリンとの会話を終えた後、早速私は自分のオフィスのドアを開けた。するとそこにはとても広々とした空間が広がっていた。ドアから向かって右側の壁にはオランダの地図が掛けられており、左

側の壁にはホワイトボードが掛けられている。私は基本的に月曜日と金曜日にこのオフィスを使うが、水曜日にはもう一人別のインターンもここで仕事をするそうだ。

大きなデスクトップパソコンが二台あり、部屋の空間として二人で共有するにしても十分すぎる広さがある。仕事のための二台の机だけではなく、四人掛けのミーティング用の机があり、さらには小さなソファまで部屋の中に置かれている。部屋の広さは申し分なく、さらには清潔感があることにも大変満足している。ここでなら自分の研究に集中できるだろうという思いが湧いてきた。この開放的な部屋にいて、今日からのインターンがより一層充実したものになるだろうと予感される。フローニンゲン:2018/2/5(月)11:21

No.726: Time Flow

“Time flow” is one of my themes, which captivates me. As I spend my life in Europe, something is accumulating in the flow of time. Groningen, 13:39, Wednesday, 2/7/2018

2098. 実現された一歩とこれからの一歩

インターン先での自室に到着し、一階に降りてコーヒーを入れ、一息入れたところで仕事を始めた。まずは改めて今回のインターンの計画表を作ることにした。

今回のインターンでは、自分の研究だけに閉じて仕事をするのではなく、MOOCの制作現場を含め、フローニンゲン大学のMOOCチームのミーティングに参加したり、MOOC関係のイベントに積極的に参加しようと思っている。

数日前に、MOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏から今週から再来週にかけてのミーティングやイベント情報を送ってもらった。それを見ながら、どのミーティングやイベントに参加をするのかを、自分の研究と照らし合わせながら決めていく必要がある。そうしたことから、以前に作成していたスケジュールを見直す必要が出てきたのである。

自室の椅子に腰掛け、机の上にある大型のデスクトップではなく、持参した自分のパソコンを用いて早速スケジュールを練り直した。昼食前にスケジュールを練り直すことができればと思っていたの

だが、計画の大枠は30分以内に作成できた。夕方にもう一度そのスケジュール案を眺め、さらに細かな計画を書き足していこうと思う。

普段の自宅の書斎とはまた違った景色を見ながら、そして違った空気を吸いながら仕事をするのが刺激となり、少し気が早いかもしれないが、仕事がとてもはかどるように感じる。週に二日ほどこのオフィスで研究を進めていくというのは、仕事の進捗と気分転換にとっても良い影響を与えるだろうと確信する。

そうこうしているうちに、早朝のミーティングの時間になった。研究インターンを始めるにあたって、データの取り扱いに関する注意事項の説明を担当者のリセッタから受けることになっている。ミーティング時間の数分前にリセッタのオフィスに足を運び、彼女から諸々の説明を聞き、データの取り扱い及び今回のインターンに関する守秘義務の契約書にサインをした。リセッタはとても気さくな女性であり、今後インターンに関して相談事があれば何かと話しやすいような人である。

ミーティングは比較的速やかに終わり、再び私は自分のオフィスに戻って仕事を再開させた。今日はこれから昼食を摂り、午後からは早速MOOCに関する研究を開始したい。こちらはすでに入念な研究計画書が出来上がっており、その計画通りにこれから研究を進めていく。具体的には、今日はデータの定量化をする際の基準作りをする。

研究対象となるMOOCが取り扱う専門用語のリストアップをまずは行っていく。今日中にこのリストアップが行えれば、それは非常に幸先の良い順調なスタートだと言える。

今、オフィスにいるのは私だけであり、一応オフィスのドアを開けている。建物内はとても静かである。そうした中、私は小さな音量でモーツァルトのピアノ曲をかけることにした。どうやらこの大学の研究者たちはあまり音楽をかけながら仕事をする習慣はないようだ。実際に、皆一様に静まり返った部屋の中で仕事を黙々と進めている。しかし、私は静かなピアノ曲がなければ仕事はかどらないので、他の部屋にいる人たちに聞こえないとでも小さな音量でモーツァルトのピアノ曲をかけることにした。今日はモーツァルトの曲と共に仕事を進めていく。

すると、開かれた私のオフィスのドアを一人の男性がノックした。どうやら、私のために新しい表札を持ってきてくれたようだ。今の私のオフィスの前にはまだ名札がかけられておらず、その箇所が裸になっていた。そこでその方は、私のために表札を持ってきてくれたようだった。

一緒にこのオフィスをシェアしているもう一人のインターンの名前と共に私の名前もそこに記載されていた。自分の名前が入った表札を見ると、どこか感慨深いものがある。このようにして海外の大学院でオフィスを持っていて学術研究を行っていることなど数年前の自分には想像できないことであった。だが、それは今この瞬間に実現されている。

研究インターンとはいえ、数ヶ月ほどフローニンゲン大学で研究者として働けることは、とても光栄なことのように思える。こうした一歩が実際に訪れるとは思ってもいなかったが、それが現実となった今、また新たな一歩を進めていこうと思う。今日の研究はまさにその一歩に他ならず、次の場所に自分を運んでくれる大切な一歩になるだろう。フローニンゲン:2018/2/5(月)11:53

No.727: The Multimedia Principle

I learned the “multimedia principle” from one of the reading materials in the course of digital learning. The essence of the principle is very simple; we learn better from words and pictures than pictures alone.

The book mentions that this principle is particularly applicable to novices. I imagine that I can acquire more knowledge and skills about music composition by reading a book with texts and pictures.

A book with only texts is not helpful for me as a novice. From my experience, I suppose that this principle works very well in the domain of music composition. Groningen, 16:07, Wednesday, 2/7/2018

2099. インターン初日の振り返り

インターンシップの初日を無事に終え、先ほど自宅に戻ってきた。今日は初日であったにもかかわらず、随分と研究がはかどった。一緒に部屋を共有しているもう一人のインターンは、私がオフィス

を訪れる日とは異なる曜日に働いているらしい。そのため、私は広々としたこの部屋を一人で使用している。それと、帰り際に隣の部屋で働いているキャロリンと話した時にも話題に出たが、月曜日のこの建物には人がほとんどいない。私のスーパーバイザーを務める二人も今日は別のオフィスで働いているようであり、とても閑散としている。キャロリンもどうやら部屋では静かにラジオをかけているらしいことがわかり、私も音楽をかけながら仕事をしていたが、これほどまでに人が少ないと音の刺激が欲しくなるのもうなづける。

今日は昼食後から本格的にデータ分析を進めた。質的データを定量化するための基準を作る作業に従事していた。この作業は今週の金曜日に再びオフィスに来た時に完成させることをめどにしていたのだが、昼食後から三時間ほど集中してこの作業に取り組んだことによって、無事に定量化の基準作りが完成した。この基準がひとたび完成すると、来週からはもう早速データ分析に入ることができるだろう。しかしその前に、もう一つだけ定量化の基準を明確にしておく必要がある。

金曜日にはもう一つの基準を作成することを午前中に行いたい。それが済めば、あとはデータ分析に向けてデータの整理を行う。金曜日に、研究対象としているMOOCの講義トランスクリプトと受講者のオンラインコメントの定性データをエクセル上で整理していく。金曜日はちょうど、エスター・ボウマ博士がオフィスに来るとのことであるので、彼女にデータの場所を聞き、そこからデータ整理に着手したい。

データを整理し、csvファイルを作成することができれば、来週からはRを使った分析を早速行うことができるだろう。思っていた以上に研究が早く進んでいきそうである。やはり、これまで研究計画書を十分に練り、今回の研究インターンが始まる随分と前からどのようにデータを集め、データをどのように加工・分析するかの明瞭なイメージを事前に持っていたことが大きいだろう。そうしたイメージを事前に持っていたことによって、研究の全体像と細部を把握しながら作業を次々に進めることができる。自分のオフィスで研究に向き合っている時はできるだけ集中し、研究を前へ前へと進めていきたいと思う。

オフィスを出て自宅に戻ろうとした頃には随分と辺りが暗くなっていた。そうした暗さよりも、やはり寒さが身に沁みたとするのが本音である。帰り際の気温は早朝よりも低く、おそらくマイナスになってい

たのではないかと思う。しかし、今日の研究の充実ぶりを思い出すと、そうした寒さもなんら問題ではなかった。

今日もオフィスの中で時折日記を書き留めていたが、オフィスで研究をしながらでも十分に日記を執筆することができることがわかった。研究をしながら絶えず日記を書き進めていくことができるのであれば、いつか正式に大学に勤務してもいいのかもしれないと思う。

金曜日のインターンがまた楽しみである。フローニンゲン:2018/2/5(月)19:59

No.728: Digital Learning Principles

I participated in the first class of the course about digital learning. I think that it is the last course I take at the university of Groningen. Since my research is about online learning and I offer online courses, this course I joined today is very beneficial for my research and practice.

After reading some chapters of the required book, I noticed that I neglected a couple of digital learning principles to make learning contents more effective for learners. I'll reconsider my contents, referring to each principle. The knowledge that I'll acquire through this course would be utilized for my consulting work. Groningen, 17:25, Wednesday, 2/7/2018

2100. 今後の大学勤務について

インターン初日から一夜が明けた。今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎた時間から今日の活動を開始させた。

インターンの初日を振り返ってみると、やはりそれは私の日々に新たな風を吹き込んでいたように思う。単純に研究に従事する場所が変わったということも心身に対して良い影響を与えていた。

インターン先のオフィスでは、自分の部屋の窓からサッカーグラウンドやその周りを取り囲む緑が見える。あいにくこの時期は寒く、私が勤務している時間帯にサッカーをしている人の姿を今のところ見るできていない。しかし、そうした外の景色は、普段自宅の書斎で仕事をしている時とは異

なるものであるがゆえに、それが新たな刺激として自分心身を別様に活性化させていたことに気づく。

今の気温はマイナス3度であり、今夜はマイナス7度まで気温が下がるようだ。この時間帯の闇と相まって、外は寒そうな顔をしている。そうした顔を眺めながら、少しずつ昨日のインターンについて振り返っている。昨日のインターンで得られた気づきの中で最も大きな意味を持つものは、大学で純粋に自分の研究に打ち込めるのであれば、大学に雇用されるというのもそれほど悪い話ではないと思ったことだ。

組織の中で働くことは私にはあまり向いていないため、研究者一人一人が自律的に動きやすいであろう大学であっても、それが一つの組織体であるがゆえに、これまではどうも大学に所属したいと思えなかった。大学に所属する便益のようなものがあるのは間違い無いだろうが、私にはそれ以上に煩わしいことが多いように思っていた。しかし、昨日のような形で自分の研究に専念できる環境がそこにあるのであれば、大学に所属するというのもそれほど悪い話ではないと思うようになった。

もちろん、研究インターンとして垣間見えることは少ないであろうし、大学組織の中で役職が上がれば様々な仕事を担う必要があるだろう。だが、そうしたことを差し引いてみたとしても、正式に大学に所属し、大学の中で研究活動に打ち込んでいく可能性については今後より真剣に考えていきたいと思う。

私は学術の世界において、教授になっていこうというような地位の獲得意識は極めて希薄である。それよりも、自分の研究に打ち込めるかどうかの方が重要であり、正直なところ、教授よりも講師の方が自分の研究に打ち込みやすいのであれば、ずっと講師でいいような気がしている。

学術世界の外に仕事がいっつかあるおかげもあり、大学で地位を求めるといった無用なことに従事しなくていい。望むのは、自分の研究に邁進できる環境のみである。

欧米の大学で講師として、今のインターンのように週に二日ほど大学で勤務することができれば理想である。いくら勤務時間が自由でも、自発的に自由に働ける環境であっても、他人が集まる組織では小さな気苦労が重なる。そうしたこともあり、大学に三日以上勤務するというのは、私にとって非

常に難しい。他に人のいない自宅の書斎で仕事をするのがやはり一番落ち着くというのが正直なところである。

大学の環境、そして雇用形態については今後より深く考えていく必要があり、諸々の条件に合致した大学がこの世界のどこかにあれば、その大学に所属したいと思う。フローニンゲン:2018/2/6(火)
06:52

No.729: Winter in Winter

I feel that I'm in winter in winter. It is neither positive nor negative, but it is "serene." I recognize that "this winter" is transforming into "that winter." Groningen, 17:14, Thursday, 2/8/2018